ジャイナ教古聖典と Dhammapada

渡 辺 研 二

はじめに

周知のごとく、ジャイナ教と仏教の比較は、両教が同じ時代、同じ地域で興起したことから、相互が格好の材料を提供してくれる。仏教研究の盛んな我が国において、この比較研究は一分野を形成し、現在大きな進展を見せている。この分野の先駆者中村元博士は一連の原始仏教研究、および有名な『スッタニ・パータ』や『ダンマパダ』の翻訳の訳注において、多くの箇所では仏典のジャイナ教聖典との類似表現に注意をし、その結果を利用して、原典の理解に大きな成果をあげた。さらに、京都の荒牧典俊教授は「Pāli parissaya について」（足利惇氏博士喜寿記念『オリент学インド学論集』1978年）によって、難語 parissaya をジャイナ教文献などの様々な文献との比較によって、意味を解明し、若手の研究者に感銘を与えた。この小論では仏教徒にとって、特に人気のある『ダンマパダ』すなわち『法句経』とジャイナ教聖典の類似表現を取り上げたい。現在までに本邦において既に『ダンマパダ』の研究には膨大な成果が発表されている。中でも『ダンマパダ』と各種の文献との詳細な対照表に関しては水野弘元教授によって『法句経の研究』春秋社 1981年という大部の研究書が発表されている。さらに西洋においては、著名なジャイナ教研究者である W.B. ボレ教授が *Reverse Index of the Dhammapada, Suttanipāta, Theragāthā and Therīgāthā Pādas with Parallels from the Āyāraṅga, Sūyagaḍa, Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya and Isibhāsiyāim Studien zur Indologie und Iranistik, Monographie 8, Reinbek 1983.* というジャイナ教聖典と原始仏教聖典の一種の対照表を発表している。最近、我が国では山崎守一教授によって「Dhammapada 並行詩脚対照表」（高木神元博士古希記念集論『仏教文化の諸相』2000年）が発表された。これも上記の研究書に加えて大いに参考になる対照表である。今回はこの水野弘元教授、W.B. ボレ教授、山崎守一教授の対照表に記述されていない類似表現を取り上げることとする。すなわち、Dhammapada とジャイナ教古聖典とくに最古の

ジャイナ教聖典 *Āyāraṅga-sutta* との類似表現を扱うことによって、ジャイナ教と仏教の比較研究に少しでも貢献したいと考えている。現在までに筆者は、「Uttarajjhāyā の研究Ⅲ— Utt. X, 23, 36 と Dh. 285 —」(『印度学仏教学研究』第26巻第1号1977年)でジャイナ教と仏教に伝えられる蓮と水の譬喩の類似表現を扱い、また “Avoiding all sinful acts by both Buddha and Mahāvira”, (Bulletin d' Études Indiennes, No. 11, Paris 1993) で諸悪莫作の表現がマハーヴィーラ出家直後の言葉とパラレルにあることを指摘し、感官を制御するという *Āyāraṅga-sutta*, *Isibhāsiyāim* 29, 19 と Dh. 360, 361, の表現が類似していることを論じた。本稿では参考になる『ダンマパダ』の翻訳は、内外に多数の翻訳が発表されているが、英国のノーマン教授の K. R. Norman; *The Word of the Doctrine(Dhammapada)*, Pali Text Society Translation Series No. 46, Pali Text Society, Oxford 1997. を参照し、本邦の中村元博士による中村元訳『ブツダの真理のことは／感興のことは』岩波文庫、東京1978年、ついで最近の榎本文雄教授の「偈文の解釈研究」(『法句譬喩経』現代語訳『真理の偈と物語』上下、大蔵出版2001年)。といったノーマン、中村、榎本の三先生の翻訳、訳注によって『ダンマパダ』の解釈の最前線に出ることができると思われる。加えて藤田宏達教授もまた「ダンマパダ(真理のことは)」(『ブツダの詩Ⅰ』原始仏典七)講談社1986の中でジャイナ教聖典とのパラレルに考慮した翻訳を発表されている。今回の比較においては Dhammapada の和訳は最も普及している中村元訳『ブツダの真理のことは／感興のことは』岩波文庫、東京1978年のものを使用し、テキストは O. von Hinüber and K. R. Norman; *DHAMMAPADA*, Pali Text Society, Oxford1994 の新版を、そして *Āyāraṅga-sutta*(Ayar.) のテキストは定評のある W. Schubring; *Āyārāṅga-sutta*(Erster Śrutaskandha), *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, Band 12, Nr. 4, Leipzig 1910. を使用した。Āyār. の当該箇所和訳は渡辺の試訳である。

Dhammapada とジャイナ教古聖典 (*Āyāraṅga-sutta*)

[I.] Dhammapada 8c: *Āyāraṅga-sutta* 1, 2, 5, 2(p.10, 1, 26)

bhojanamhi ca mattaññum

食事に関して (適当な) 量を知り、

Dhammapada 185c:

mattaññutā ca bhattasmim

食物に関して (適当な) 量を知り、

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta I, 2, 5, 2(p. 10, 1. 26):

laddhe āhāre aṇaḅāro māyaṃ jāṇejjā

出家は食物を得るのにさいして量を知れ。

が比較される。Dhp. 8c, 185c の mattaññu は mātra (量) と $\sqrt{jñā}$ と (知る) の組み合わせであり、Āyār. の māyaṃ jāṇejjā も同じく mātraṃ $\sqrt{jñā}$ の組み合わせである。修行者が食事の量を節制するということは、インドでは一般に認められていたことであり、ジャイナ教、仏教だけでなく、叙事詩でも「暮らして行けるだけの食物をとれ」(yatrāram āhāram ihādadita; VII, 270, 26) いう。

[II.] Dhammapada 21ab: Āyāraṅga-sutta, I, 3, 4, 1(p.16, 1. 26)

appamādo amatapadaṃ pamādo maccuno padaṃ,

つとめ励むのは不死の境地である。

怠りなまけるのは死の境涯である。

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, I, 3, 4, 1(p.16, 1. 26):

savvaṃ pamattassa bhayaṃ, savvaṃ apamattassa na' tthi bhayaṃ

一切処において、不注意の人にとって恐怖がある。

一切処において、注意深い人にとって恐怖はない。

see Dhp. 31ab=32ab:

appamādarato bhikkhu pamāde bhayaḁassivā

いそむことを楽しみ放逸に恐れをいなく修行僧は、

一般に pramāda を「怠惰」、apramāda を「精励」と解して、出家修行者の実践における心構えというように説かれている。事実ジャイナ教と仏教では共にとくに怠けてはならぬ、修行に努力精励せよ、ということがいたる所で述べられている。特に仏教では「怠惰でないこと」(=策励)は最上の財宝 (dhanam deṭṭham; Dhp. 26c) であり、賢者はそれを楽しんでいる (paṇḁitā appamāde pamodanti; Dhp. 22bc)。それが聖者の境地 (ariyānaṃ gocare ratā; Dhp. 22d) であるといわれている。まとまって『スッタニパータ』の第二章一〇節「はげみ」、『ダンマパダ』第二章「はげみ」ではとくに pamāda (pramāda) を強調している。一方、ジャイナ教ではマハーヴィーラの「ゴーマヤよ！一瞬たりとも怠るなかれ」(Utt. 第 10 章) という言葉が

有名である。これはマハーヴィーラの一番弟子ゴーヤマにたいする警策の言葉として『ウッタラッジャーヤ』第10章で繰り返される「怠るなかれ」(mā pamāyae) という言葉に端的に見られるように、ジャイナ教でも強調されることである。故L.アルスドルフ教授はこの箇所を注釈や伝統的解釈をすべて否定して、「ゴーヤマよ！この（人間に生まれた）機会（samaya）を逸するなかれ」と新解釈するも、筆者はかつて注釈者や伝統的解釈に従って、「ゴーヤマよ！一瞬たりとも怠ることなかれ」(samayaṃ Goyama! mā pamāyae) と理解することが自然であると論じた。しかしながら、pramāda の一般的解釈に関しては、ジャイナ教では appamāda は「注意深くすること」、pamāda は「不注意」の意味合いが強い。これは「注意深くすることで」周辺の靈魂を傷つけ、殺すことを避けることができる、しかし「不注意」は知らず知らずのうちに靈魂を殺している、とジャイナ教徒は考えているのである。あらゆる動作が生き物に対する暴力を引き起こすという状況認識である。サンスクリット語では否定辞のついた名詞は積極的に強い意味をもつことがある。したがって apramāda は「不放逸」は積極的に「注意深いこと」というような意味になりうる。この Āyāraṅga-sutta, I, 3, 4, 1 では古い注釈 Cuṇṇi は bhayaṃ kammaṃ と解釈して「恐怖」とは業（kamma）である、とする。一方、Ṭikā は普通に bhayaṃ bhītiḥ (172a) と同義語を繰り返すことによって語釈を示す。この Cuṇṇi の解釈はおそらく「不注意（pamāya=pramada）が業（の原因）であり、注意深いこと（appamāya=apramāda）はそれと反対であると説かれる。それが有り、あるいは無いときに、それぞれ愚者（bala）あるいは賢者（pañḍiya）とされるのである」（Sūy. I, 8, 1-3）というアーガマの解釈を引き継いでいるのであろう。

[III.] Dhammapada 25: Āyāraṅga-sutta, I, 6, 3, 3(p.30, 1. 6)

uṭṭhānen' appamādena saññāmena damena ca
dīpaṃ kayirātha medhāvī yaṃ ogho nābhikirati.

思慮ある人は、奮い立ち、努めはげみ、自制・克己によって、
激流もおし流すことのできない島をつくれ。

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, I, 6, 3, 3(p.30, 1. 6)

jahā se dive asaṃdīne evaṃ se dhamme āriya-desie.

あたかも水に浸ったことのない州のように、その法は聖者に

よって説かれたのである。

インドにおける洪水のとき、若干高くなっている州が水に浸らないことから、このようにいうのである。この場合 *dīva* (=dvīpa) は州あるいは島を意味する。ジャイナ教の文脈では仏教における法灯明自灯明の灯明 (*dīpa*) の意味には取ることがないようである。この *Āyār.* では法 (*dhamma*) が州にたとえられている。このことは次にあげるゴータマ・ブツダの最後の旅におけるアーナンダに対する説法の内容を思い出させる。つまり、「それゆえ、アーナンダよ！自らを島 (*dīpa*) とし、自らをたより (*saraṇa*) として、他のものをたよりとせず、法 (*dhamma*) を島 (*dīpa*) とし、法をよりどころ (*saraṇa*) として、他のものをよりどころとするな」(DN. vol. II, p. 100=MPS. II, 25-26.) (Tasmā ih' Ānanda attā-dīpā viharatha attā-saraṇā anañña-saraṇā, dhamma-dīpā dhamma-saraṇā anañña-saraṇā)

[IV.] Dhammapada 34cd: *Āyāraṅga-sutta*, I, 4, 3, 2(p.19, 1. 26)

vārijo va thale khitto okamokata ubbhato

pariphandat' idaṃ cittaṃ Māradheyyaṃ pahātave.

水の中の住居から引き出されて陸の上に

投げすてられた魚のように、この心は、悪魔の支配

からのがれようとしてもがきまわる。

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, I, 4, 3, 2(p. 19, 1. 26)

logaṃ ca pāsa vipphandamānaṃ

世間の生きものが(痙攣するように)震えているのを見よ！

陸に上がった魚が苦しくて震えている、という譬喩は大変生々しく、状況を描いている。『ダンマパダ』に陸に上がった魚の譬えが示されているので、動詞 *pariphandati*, *vipphandamāna* は共に $\sqrt{\text{spand}}$ であり「振動する」「震える」しかも「痙攣性の震え」がその意味にあるのが背景と共によく理解できる。古い注釈 *Āyār. Cuṇṇi*147 は *logo savvo jīva-logo* と注釈して、世間とは世間の靈魂 (*jīva*) を示唆している。世間の靈魂 (生き物) は様々な暴力の危険に震えている、というようにジャイナ教では考えていた、というように解釈できる。『ダンマパダ』の

譬喩によって、Āyār. の当該箇所が生命の危機に関わるより生々しい描写であることが判明した。なお、後世の注釈文献 (Devanandin ad. TS. 6. 11) に「靈魂点の振動」という意味で parispanda という単語が用いられていることも付け加えておく。この Dhṛ. 34cd と Āyār. 1, 4, 3, 2 の「陸に上がった魚」の類似表現は『スッタニパータ』の方に複数の類似表現がみられる。この『ダンマパダ』と『スッタニパータ』の類似表現は現在までの対照表にはのっていない。さらに、「陸に上がった魚」の類似表現は東北大学の後藤敏文教授によれば、バラモン系の文献にもみられ、『マヌ法典』にもある、とのご指摘をうけた。記して感謝する。古い仏典『スッタニパータ』には次の類似表現がみられる。

see: phandamānaṃ pajam disvā macche appodake yathā

aññamaññehi vyāruddhe disvā maṃ bhayaṃ aṅsi. (Sn. 936)

水の少ないところにいる魚のように、人々が慄えているのを見て、また人々が相互に抗争しているのを見て、私に恐怖が起った。

see: passāmi loke pariṇandamānaṃ

pajam imaṃ taṇhāgataṃ bhavesu, (Sn. 776ab)

この世の人々が、諸々の生存にとらわれ、ふるえているのを、わたしは見る。

Aññe pi passa gamine yathākammūpage nare

maccuno vasam āgamma phandante v' idha pāṇine (Sn. 587)

見よ。[生きている] 人々は、また自分のつくった業にしたがって死んで行く。かれら生あるものどもは死に捕らえられて、この世で慄えおののいている。

「陸に上がった魚」の譬えは他のジャイナ教文献では、

tattha maṃdā visiyamti macchā apodae jahā (Sūy. 1. 3. 1. 5)

まるで水のないところの魚のように、意気消沈してしまう。

macchā va jhīṇa-pāṇiyā kaṅkāṇaṃ ghāsam āgatā (Isibh. 41. 4)

譬えは (自己の居る) 水の尽きたる魚達は諸々の鷺の餌となる如く、(松濤誠廉教授訳) がある。

[V.] Dhammapada 85: Āyāraṅga-sutta, I, 6, 5, 6(p.32, 1. 21)

appakā te manussesu ye janā pāragāmino,

athāyaṃ itara pajā tiram evānudhāvati.

人々が多いが、彼岸に達する人々は少ない。

他の (多くの) 人々はこなたの岸の上でさまよっている。

という表現に対しジャイナ教では、
 Āyāraṅga-sutta, I, 6, 5, 6(p. 32, 1. 21)
 se hu pāraṃgāme muṇi
 かれはじつに彼岸に行った聖者である。

[VI.] Dhammapada 325: Āyāraṅga-sutta, I, 1, 6, 1(p.5, 11. 3-4)
 punappunaṃ gabbham upeti mando.
 愚鈍な人は、くりかえし母胎に入って (迷いの生存をつづける)。

という表現に対しジャイナ教では、
 Āyāraṅga-sutta, I, 1, 6, 1(p.5, 11. 3-4)
 esa saṃsāre tti pavuccai
mandassa avijāṇao.
 無智なる愚鈍な者にとって、これは輪廻と呼ばれる。

[VII.] Dhammapada 366ab: Āyāraṅga-sutta, I, 2, 4, 4(p.10. 1. 4)
 appalābho pi ce bhikkhu salābham nātimaññati
 たとい得たものは少なくとも、修行僧が自分の得たものを
 軽んずることがないならば、[怠ることなく清く生きるその人を、神々も称賛する.]

という表現に対しジャイナ教では、
 Āyāraṅga-sutta, I, 2, 4, 4(p.10. 1.4)
 'na me dei' na kuppejjā thovaṃ laddhuṃ na khiṃsae,
 「かれは私に与えない」と怒ってはならない。得るものが僅かであっても、不平をいって
 はならない。

[VIII.] Dhammapada 367ab : Āyāraṅga-sutta, I, 2, 5, 3(p.10, 1. 20)
 sabbaso nāmarūpasmim̐ yassa n' atthi mamāyitaṃ
 名称とかたちにとって、「わがもの」という思いが全く存在しないで、[何ものも無いから
 らとて憂えることの無い人、——かれこそ、〈修行僧〉とよばれる.]

という表現に対しジャイナ教では、
 Āyāraṅga-sutta, I, 2, 5, 3(p.10, 1. 20)

pariggahaṃ amamañyamaṇe,

所有物をわがものと見なさない。

[IX.] Dhammapada 370cd: Āyāraṅga-sutta, 1, 2, 6, 4=1, 5, 3, 5(p.12, 1. 17=p.23, 1. 29)

pañcasaṅgatiḅ bhikkhu oghatiṅṅo ti vuccati.

五つの執着を越えた修行僧は、〈激流を渡った者〉とよばれる。

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, 1, 2, 6, 4=1, 5, 3, 5(p.12, 1. 17=p.23, 1. 29)

esa ohaṅtare muṅi tiṅṅe mutte virae viyāhie — tti bemi.

この者を激流を横切って、渡った、解脱した、欲望を制した聖者（ムニ）であると解説すると、わたしは言う。

Dhp. 370 の五つの執着は貪り (rāga) と怒り (dosa) と迷妄 (moha) と高慢 (māna) と誤った見解 (ditṭhi) とである、と注釈にあるが、この項目はジャイナ教に共通のものである。

[X.] Dhammapada 379cd: Āyāraṅga-sutta, 1, 3, 3, 1(p.15, 1. 25)

so attagutto satimā sukhaṃ bhikkhu vihāhisi.

修行僧よ。自己を護り、正しい念をもてば、汝は安楽に住するであろう。

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, 1, 3, 3, 1(p.15, 1. 25)

āya-gutte sayā dhire jāyā-māyāe jāvae

賢者（気をつけている人）はつねにアートマンを護っている。

dhira は普通、賢者と訳されているが、中村元博士によれば、現代のヒンディー語でも「気をつけて」という意味があり、「気をつけて思慮する人々」のことを dhira という、と指摘されている。上記 Dhp. 379 でも attagutto の次にある satimā にも「気をつける」の意味がある。以下、Āyār. 1, 3, 1, 3 の āyagutta の前に appamatta（注意深くする）が置かれ、さらに Āyār. 1, 8, 2, 4 の āya-gutta のすぐ前に paḍilehāe「気をつけて観察する」というジャイナ教特有の動詞が置かれている。āya-gutta（アートマンを護る）という単語の前後には「気をつける」という意味の単語が付いてくることは注目に値する。

see: Āyār. 1, 3, 1, 3(p.13, 1. 26)

appamatto kāmehiṃ, uvarato pāvakammehiṃ, vīre āyagutte,

アートマンを護っている勇者は、諸々の欲望によって放逸となることなく、諸々の悪業を留めた。

Āyār. 1, 8, 2, 4(p.34, 1, 30):

goyarassa añupuvveṇaṃ sammam paḍilehāe āya-gutte.

[修行者は] アートマンを護って、対象を順次に正しく（気をつけて）観察すべし。

[XI.] Dhammapada 418a: Āyāraṅga-sutta, 1, 2, 6, 3(p.12, 1. 11)

hitvā ratīṅ ca aratiṅ ca

〈快樂〉と〈不快〉とを捨て、

という表現に対しジャイナ教では、

Āyāraṅga-sutta, 1, 2, 6, 3(p.12, 1. 11)

nāraim sahae vīre, vīre no sahae ratim

勇者は、不快に堪えず、また快をも耐えず

sec: Āyār. 1, 3, 1, 2(p.13, 1. 16)

sīōsīṇa-ccāi se nigganthe arai-rai-sahe pharusiyaṃ no veei.

寒・暑を捨てたニガンタは不快・快に堪え、感触を感じない。

以上。

〈キーワード〉 Dhammapada, Āyāraṅga

(前大正大学非常勤講師)

掲載されなかった諸氏の発表題目 (3)

Godāna 儀礼と vedavrata

梶原 三恵子 (京都大学非常勤講師)

無自性論証と経典の権威

—— Kamaraśīla の経典採用方法について ——

計良 龍成 (鶴見大学)

m-iddha- with a ‘hiatus-bridging’ *m* was misunderstood as *thīna-* + *middha-*; the artificial word *middha-* has no different sense from that of *thīna* (mid-dha)-”. This theory contradicts our philological research: 1) since the early stage of the Pāli Canon (Gāthā), *middha-* and its derivative *middhin-* are used as simplex with a different meaning from *thīna-*; 2) Aṃg. *thīṇagiddhi/thīṇaddhi-* is attested only in enumerations of technical terms and is evidently younger than Pāli *middha-*.

Pa. (= BHS) *middha-* nt. ‘drowsiness, doze’ is supposed to have developed from ved. *mṛdhrá-* (RV +) nt. ‘fatigue, decrease of activity, etc.’, adj. ‘tired, inactive, negligent, etc.’ as well as p.p. *mṛddhā-* (Br.). For want of sleep, monks and nuns were annoyed by sleepiness and doze especially during *jhāna-* (*dhyaṇa-*) ‘sitting meditation’, which caused a specialization of the sense of *middha-*. On the other hand, *thīna-* (< **stīna-*; cf. Skt. adj. *styāna-* ‘coagulated, stagnant’) was used as a nt. noun ‘stagnation/inactivity of mental function (*citta-*), depression’ esp. with regard to the meditation. As a hindrance to meditation, *thīna-* and *middha-* combined into a dvandva-compound *thīna-middha-*, rendered *styāna-middha-* in BHS. In the course of time, the sense of the compound was simplified to ‘doze, sitting or walking sleep’ and the beginning consonant of *middha-* became obscure. Probably in this period, *thīna-middha-* with its synonyms *niddā-* and *pacalāyikā-* was introduced into Jainism, composing a part of Darśaṇāvaraṇīya-Karman. Contrary to Edgerton’s theory, *m* in *middha-* was removed to build Aṃg. *thīṇaddhi-* (Jaina-Skt. *styāna-rddhi-*), or replaced with *g* (under association with *giddhi-* ‘greed’) to bring forth *thīṇagiddhi-* (*styāna-grddhi-*). Since the original sense of *middha-* ‘sitting sleep’ or ‘walking sleep’ was allotted to *payalā-* (*pacalā-*) and *payalā-payalā* (*pacalāpacalā-*), *thīṇaddhi-/thīṇagiddhi-* was reinterpreted as ‘action in sleep, somnambulism, etc.’.

163. A Select Comparison of Passages from the *ḍhammapada* and the *āyār-āṅga-sutta*

Kenji WATANABE

As is well known, Buddhism and Jainism share many common elements in their phraseology. The subject has been often investigated. For an investigation of the close parallels which can be traced between Pāli and Ardhamāgadhī texts, see H. Nakamura, “Common Elements in Early Jain and Buddhist Literature”, in *Indologica Taurinensia* vol.XI (1983), pp. 302-330 (Proceedings of the International Symposium on Jaina Canonical and Narrative Literature. Strasbourg, 16th-19th June 1981); K. Mizuno, “Hokkukyō no kenkyū” Shunjūsha Tokyo, 1981.; W. B. Bollé, “Reverse Index of the Dhammapada, Suttanipāta, Theragāthā and Therīgāthā Pādas with Parallels from Ayāraṅga, Sūyagaḍa, Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya and Isibhāsiyāim”, *Studien zur Indologie und Iranistik*, Monographie 8, Reinbek 1983 ; C. Caillat, “Jainology in Western Publications II”, in *Jain Studies in Honour of J. Deleu*, ed. by R. Smet and K. Watanabe. Tokyo, 1993, especially pp. 50-51. In this small paper, I would like to indicate comparable passages which seem to have been overlooked so far.

164. On the Pervasion of *hetu* in *pakṣa*

Noboru UEDA

In connection with the first condition of *hetu* (logical reason) some classical Chinese and Japanese treatises dealing with Buddhist logic refer to an opponent who argues that every *pakṣa-dharma* necessarily pervades the *pakṣa* and there cannot be a *pakṣa-dharma* that exists only in a part of the *pakṣa*. Logically speaking, however, the position of the opponent, it seems to me, can be that of Dignāga. In order to understand the position, the present paper proposes a mass interpretation, according to which the *pakṣa* is considered to be a mass of a certain kind of substance designated by a mass term such as “a cup of blue water”, and the *pakṣa-dharma* is considered a property of the mass, such as “blue”.